

国文祭・芸文祭みやざき 2020 プレイベント

シンポジウム「2021年。いまこそ『みやざき県ゆかいアート村』」議事録【概要版】

日 時：令和3年4月3日（土）午前10時から午後1時まで

場 所：宮崎県庁防災拠点庁舎7階会議室

登壇者：ファシリテーター 山森達也氏（アーツカウンシルみやざきプログラムディレクター）

【第1部 パネルディスカッション】（10:10～11:30）

パネリスト 青井美保氏（高鍋町美術館学芸員）（村民D）

高峰由美氏（株式会社ブルーバニーカンパニー代表取締役）（村民C）

木村郷子氏（宮崎わたぼうし会副会長）（村民B）

愛甲貴大氏（アートステーションどんこや生活支援員）（村民A）

大塚千枝氏（厚生労働省 障害者文化芸術計画推進官）

【第2部 対談】（11:50～13:00）

パネリスト 吉野さつき氏（愛知大学文学部教授）

永山智行氏（劇団こふく劇場代表、芸文祭コーディネーター）

主 催：厚生労働省 文化庁 宮崎県 宮崎県教育委員会 第35回国民文化祭宮崎県実行委員会、第20回全国障害者芸術・文化祭実行委員会

「みやざき県ゆかいアート村」コンセプト

人間はいつの時代も「生きづらさ」を抱えて生きている。

そんな日常を、芸術文化、アートというメガネをかけて見てみることで、

ふだんとはあべこべに見える景色があったり、当たり前前に思っていた物語とはまったく違う物語が見えてきたりする。

長い人類の歴史の中で、芸術文化はそのようにして、

「生きづらさ」を他者と共有することを通して、

人が生きることそのものの喜びの物語を紡いできた。

今回の全国障害者芸術・文化祭みやざき大会では、各イベントの会場を、

架空の「みやざき県ゆかいアート村」という土地に見立て、

演者や観客、スタッフもみな村民として、日常とは違う視点で、

誰もがゆかいに過ごしている理想の村の時間を過ごしていただけたらと思っている。

やがてその理想が、現実へと流れ込み、この社会の「生きづらさ」が、

人と人との喜びに変わっていくことを願う。

「ゆかいアート村 開村宣言」

ゆかいアート村 村長 和田祥吾氏、秘書課若手職員 池田孝彰氏

いま ここから

ゆかいアート村を はじめます

と あなたが言葉にすれば

そのときから そこはもう

広場になる

いま ここから

ゆかいアート村をはじめます

あなたの言葉は あなたをはみだし

わたしの肩に触れる

おいで ここへ と

いま ここから

ゆかいアート村を はじめます

だからわたしも 言葉にしてみよう

さびしい誰かの肩に触れ

おいで ここへ 広場へ と

伝えてみよう

いま ここから

ゆかいアート村をはじめます

第一部 パネルディスカッション

○自己紹介

・村民D：高鍋町美術館学芸員 青井美保氏

芸文祭事業「みやざきアーティストファイル『ギフト展』」担当

みやざきアートセンターに学芸員として勤務していた 2011 年、宮崎市美術展を担当した際の絵画部門の大賞が伊藤有紀恵さんだったが、このとき審査員を務められた、熊本市現代美術館の富澤治子氏が「この方の展覧会をしたい」と言われ、学芸員の実行力や魅力を体感するとともに、障がい者芸術というくくりは気にせず、自分の仕事の中に取り組んでいくべきというところを初めて大きく感じた。

2017 年、高鍋町美術館で、宮崎アーティストファイルシリーズという、宮崎の若手作家を紹介する展覧会において、伊藤さんを作家として入れるに当たり、障がい者芸術を取り込むには、どういう形が一番自然か考えた末に、他の作家と同じように、作家として選んで、作品を選び、展示するという当たり前のことを当たり前にする事だと、自分なりの答えを出した。

今回、障がいのある作家に限って、絞った形で展覧会に取り組む。作品展名の「ギフト」とは、才能。あなたが持っている才能、「ギフト」に気づいていますか、と問いかけるような展覧会でありたい。

・村民C：株式会社ブルーバニーカンパニー代表取締役 高峰由美氏

芸文祭事業「全国連携事業『不死鳥（フェニックス）ウォールアート』」担当

東京で化粧品の仕事をしていましたが、宮崎に帰ってきて、企業の経営のサポートをする仕事を 10 年以上、B型施設の工賃向上の仕事を 10 年くらいやっている。

工賃を上げるのは難しいと感じているが、とても表現が得意な方がいらっしゃることから、この力強い自由な表現を、デザイナーが接点としてつなぐことで、企業の仕事にして、工賃、お金とし、社会とも参加できるようなことができないか、ずっと考えていた。

最初は自分が起業することは考えていなかったが、いろんなきっかけがあり、2017 年 1 月に会社を立ち上げ、4 年目になる。

当社のデザインの特徴は、明るい、ポップなデザイン。

私は「Color The World」という言葉が好きで、いろんな方と一緒に世の中を明るくしていけるような作品、デザインを作っていきたいと思っている。

・村民B：宮崎わたぼうし会副会長 木村郷子氏

芸文祭事業「第 40 回わたぼうし宮崎コンサート 2020」担当

奈良で 1976 年に開催された、「第 1 回全国わたぼうし音楽祭」がルーツ。宮崎でも、昭和 56 年から 40 年以上続いている活動。

障がい者の思いを詩にして寄せていただき、曲をつけて紹介するコンサート。毎年テーマを設け、そのテーマに沿った作品を会員で選び、6 名の作詞者、6 名の作曲者の計 12 名の入選者で作品を発表していただく。

ただ曲を聴いていただくだけでなく、より入選者の方のことが伝わり、感じていただけるよう、スタッフが訪問して日頃の様子や作品に込めた思いを聞きとり、まとめて台本化したものをMCと作者とのかけあいという形で紹介するのが第一部。

第二部は障がいのある方を中心に音楽活動をされている方々に出演いただくオリジナルコンサート。

今回は、国文祭・芸文祭の一環として開催するため、宮崎市出身のピアニスト、野田あすかさんにも出演していただく予定。

当日の会場ロビーでは、入選者の作成した絵や短歌、俳句を展示し、観客に紹介したり、宮崎市の施設の作業所の販売も行っている。

当会のイベントの特徴としては、専門学校生や高校生を中心に声をかけ、多数の学生ボランティアの方々に関わっていただいていること。会員がプロの演出家ではなくボランティアであるため、芸術の分野に若い感性を持ち寄って参加していただきたいという思いがある。

そうすることで、若い方々の障がい者理解につながるきっかけになるとともに、出演者にとっても、若い人ががんばる姿を見ることで、未来や希望につながると思う。

今回のコンサートテーマは、「想いあい、紡いで」。2年前に決定したテーマだが、コロナを経て、人とのつながりや、お互いを思い合うことが時代に沿うことから、訴えていきたいと思う。

・村民A：アートステーションどんこや生活支援員 愛甲貴大氏
芸文祭事業「ココロノイロ～県内障がい者アート作品展～」担当

アートステーションどんこやは、福祉サービス事業所で、利用者それぞれが、それぞれのペースで、自分らしく表現することを大切に、「その人らしさ」が一番、というところで活動している。

また、宮崎県障がい者芸術文化支援センターとして、障がいのある方の芸術活動や、活躍する場や社会とつながっていく場がもっと広がっていくような活動を行う。

人が中心にあって、表現することはひとつの選択肢かもしれないが、表現することを通じて、知る、学ぶ、触れる、というところ、「共に」やっていくというところ、もしかしたらこれが「ゆかいアート村」かもしれないが、いろんなところで生まれていくといいと思う。

今回の国文祭・芸文祭では、「ココロノイロ～県内障がい者アート作品展～」を担当する。

大会の方針として、「共に生きる 共に感じる 文化で紡ぐ共生社会」というお題があり、いろいろ考えた。私たちが何を大事にするか、どんなところを伝えたいか、どんなところでわくわくするか、というところで、やはりそこに人がいるというところ、人と人がつながる、交流する、ふれあう、というものが、この大会で起こっていき、見て、感じていただけるといいと思う。

もうひとつ、私は常に利用者さんの側において、作品にはすごく物語がある、ということを感じて、感じる。個々の物語がすごくおもしろい。

未来、今後の展望については、今大会が、考えたり、感じたり、共に触れ合ったり、いろんなきっかけになってほしいと思っている。根本的には、表現するという、その人の思いを感じることは大事だと思うので、楽しんで、感じていきたいと思っている。

表現されたものにはいろんな可能性があると思うが、アートの可能性のひとつとして、自然に隣の人とつながる、見た人の交流が生まれるところがすごいと思っている。

実際、芸術文化って難しくないのではないかと考えていて、実はすぐ隣にいたりとか、目の前にいた

りとかする。国文祭・芸文祭であってもなくても、すぐそこにいて、感じて、より豊かな生き方ができていくのではないかと考えている。

○大塚氏コメント

国文祭・芸文祭の開催に当たり、色々な苦勞があったかと思うが、皆さん楽しく準備をされていて、とても嬉しく思う。

私が在籍する厚生労働省障害保健福祉部は、障がいがある方の支援制度やサービスを担当する部署で、自立と社会参加を促進する観点からの文化芸術活動の支援を行っている。

文化芸術基本法では、文化芸術は、障がいの有無にかかわらず、誰もが楽しんだり、参加したり、といった権利を持つ、と規定されていて、障がいのある人に限って特別に推進していこうということではない。

さきほど高峰さんが言われた「壁を越える」という言葉、すごくすてきなあとと思うが、文化芸術は壁を越える力を持っていて、それで、みんなを豊かに、ゆかいにしてくれる。人を大事にしてその人が輝く、人をみんなで大事にできる、そんな社会を作っていけるといい。

「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が、2018年にできた。この法律ができたことも、かなり近年の活動の後押しになっていると思う。法律に基づいて国の方でもしっかり推進していきたいと考え、大事にしたいことを基本計画の中に書いており、その中の一つが、どんな障がいのある方でも、あるいは、生きづらい方でも、どこにいる方でも、どんな年齢の方でも、文化芸術活動を知って、楽しんでいただけるようにサポートしていくことなどを目指しているが、4人の皆さんはそれらを実現されていると思った。

○意見交換

山森氏：壁を越えるための表現や芸術なのか、それとも、壁を越えたところに表現があるのか。

高峰氏：企業も施設と接点を持ちたいが、ちょっと距離が遠い、というところで、私たちデザインが橋渡しをしているイメージ。壁を、私たちが接点としてつないでいる。

壁を越えるものが文化芸術なのでは。アートが、壁を壊していく。

大塚氏：文化芸術は、特別な人が特別なときにやるもので、あまり自分とは関係ないと思っている人もたくさんいるかもしれないが、誰にとっても、食事と同じように大事なものではないかと思う。

青井氏：作家の調査に行ったとき感じるのは、作品を作りましょう、と言って作る作品よりも、休憩時間に作っている作品の方が良い。自分自身が本当にしたいものが良い作品に見える。

愛甲氏：作品として届けるところも非常に大事だが、アートの枠に収めようとすらしていない、日常生活の中で表現されていることが本当にいっぱいあふれていて、近くにいると心地よく感じる。こんな場が広がっていく社会はいいと思う。

高峰氏：クライアントのニーズの作品を描いていただくとき、一番気にするのは納期で、極力長くするため、早めに声をかける。急がせて負担をかけたり、プレッシャーになると、元々の作品の自由さや元気が出なくなるおそれがあるため、施設のスタッフとのコミュニケーションを大事にしている。

木村氏：作品だけでなく、その作品が生まれた生活や背景も一緒に伝えることが、その人を知ってい

ただくことになると考え、事前に何度も会って関係作りをするとともに、当日の楽屋でも、のびのびとリラックスして出演していただけるよう、雰囲気づくりを心がけている。

大塚氏：全国に設置する障害者芸術文化活動支援センターのひとつが、障がい者の方が利用する事業所を中心にネットワーク作りをする中で、ある事業所で病気のため絵を描くことを制限された利用者が、唾液を使って壁紙をはがして、壁に絵ができていたことがあった。施設では、壁紙をはがすのは問題ではなく、これもアートだと気づき、アートのネットワークに参加したことで、ケアの見方が変わったという事例を聞いたことがある。文化芸術の活動によって、その人を見る目線を変えるケアのあり方が生まれるきっかけになっている。

○国文祭・芸文祭後のそれぞれの活動について

青井氏：未来のことを考えるに当たり、どの美術館にも、障がい者芸術と今言われている作品が自然に收藏されるときが来るべきではないかと思ったが、日本の障がい者芸術全体の、ものすごく大きな課題をはらんでいると感じている。例えば、障がいのない作家の場合は受賞歴などを勘案して收藏するが、評価をどうするのかとか、公立の美術館におけるシステムなど。

高峰氏：普段障がいという事柄に向き合っていない方々に、感覚的にいいもの、かわいいもの、好きなものを届ける、接点をつくるのが私たちの役割とっており、身近な、いろんなところに、みんなが「好き」と思えるものが、もっと増えてくるといい。

木村氏：コンサートをたくさんの方に見に来ていただき、スタッフとしても関わっていただいて、「想いあいの風」がずっと吹き続けるような世の中になっていくといいと思う。

愛甲氏：国文祭・芸文祭が大きな目的となって、今、いろんな人たちがつながっていったり、話を聞いていただける機会がいっぱいあるが、大会を通じて、いろんなことを感じたり、知っていただいたり、といったつながりを大会後もしっかりと大事にしながら、いろんな人と、いろんなことを言い合いながら、いろんなことを感じながら続いていくのが希望である。

大塚氏：障害者芸術文化祭を国民文化祭と一緒に開催していただくようになってから、いろんな広がりを持つようになった。イベント的な要素も強いが、何かするという目標をしながら、準備段階からつながってくるネットワークが、5年後、10年後に何かを生み出すような、種みたいなものになってくれるといいと思っている。

せっかくこの機会にされていることは、花が開くまで、水やりや栄養をあげるなど、さらにこれから大きな花を開くように、皆さんで継続してほしい。

第二部 対談

○質問と回答

質問：「障がい者芸術は、いつからその概念ができたのですか。」

回答：1940年代頃、従来のアカデミックな芸術に対する反芸術活動の中で生まれた。（山森氏）

質問：「国民文化祭、障害者芸術・文化祭、分けることについて、どう感じていますか。

メリット・デメリットがあれば教えてください。」

回答：元々は、文化庁が国民文化祭を先に実施していたが、厚生労働省で障がいのある人たちの社会参加を推進したいという目的で、別々に始まった経緯がある。

それぞれがやるのではなく、一緒にやった方がいいのではないか、という声も、国民文化祭の実行委員などからあがり、一体的になったのが平成29年、2017年の奈良大会から。

現在は、名前が別々で一体感がなく、長くて大変では、という声もあがり、文化庁と相談の上、開催要綱を改正し、共通で統一した名前を開催県に作ってもらうことが決まったところ。沖縄大会（令和4年度）以降になる。

別々の事業になっていることのメリットは、2つの事業の予算を活用できること、異なる省庁がお互いの専門領域に対して意識を高めるようになることともに、開催する自治体の縦割りがつながる機会になること。（大塚氏）

○自己紹介

吉野氏：愛知大学文学部人文社会学科現代文化コースに所属している、吉野さつきです。

実務家教員という立場で、もともとは舞台芸術関係の分野が主。

舞台芸術分野の作品づくりや公演のマネジメント、公共の劇場の職員を経て、ここ最近は、障がいのある方との現場や教育の現場などで、アーティストによるワークショップなどのコーディネーターをしている。

奈良県のたんぽぽの家を母体とするエイブルアート・ジャパンというNPO団体による、障がいのある人もない人も一緒に新しい舞台芸術を作ろうという5年間に渡る、エイブル・アート・オン・ステージという試みがあった際、永山さんがまあい劇場で応募されていて2007年に初めて出会い、エイブル・アート・オン・ステージの実行委員として、その公演を見るために宮崎にも初めて来た。

また、厚生労働省による「障害者芸術文化活動普及支援事業」で、昨年度まで評価委員をしていた。

山森氏：吉野さんは、「Unlimited」という文化芸術プログラムで有名な、ロンドンオリンピック・パラリンピックの開会式のジェニー・シーレイさんを連れてきた方。

永山氏：ゆかいアート村、出会い系プロジェクト担当、芸文祭コーディネーターの永山智行です。劇団こふく劇場という劇団を、三股町立文化会館のフランチャイズカンパニーとしてやっていて、31年目に入った。

2001年が最初だったと思うが、平田オリザさんの演劇ワークショップを見学に行ってどんこやさんという事業所と出会った。

そこで初めて障がいをもった方と演劇のワークショップをやって、その流れで2006年のエイブルアート・オンステージという事業で作品を作るという企画があり、「みやぎき◎まあるい劇場」というプロジェクトをそこからスタートしている。

よく誤解されて「障がい者の劇団ですか」と言われることがあるが、障がいを持っている人もいるだけなので、障がい者も参加しているというプロジェクト。

エイブルアート・オンステージの1回目の上演が2007年2月で、三股町立文化会館で「隣の町」という作品を上演して以来、まあるい劇場はずっと今も続けている。何年かに1回やって、作品を持ってツアーに行く。福島県のいわき市、神奈川、広島、鳥取など。あくまで作品を作ることをメインにしている。

障がい者が表現する機会を作っているつもりは全くなく、あくまで作品を作ることを主眼にしているので、入場料もいただき、稽古も、私たちの劇団で普段やっているのと同じ分のストレッチや発声など全部含めて丁寧にやって、稽古も普段どおり稽古して活動している。

今日・明日のイベント（三県演劇）は、同じように、障がいのある方も参加している中でクオリティーの高い作品を作るという活動をしている、広島と鳥取の劇団とのつながりの中で、企画した。

- 「芸術かそうでないか、プロを目指すこととそうではなくて生まれるもの、評価されることとそうでないこと、垣根を越えて違いを認め合うことの大切さと同時に、何かモヤモヤもある」という来場者からの感想を踏まえた、第一部の感想

吉野氏：そこにそもそも壁があると思うのかどうか、違いがあると思うのかどうか、ということから考えた方がいいのかな、と思った。

例えば、人種問題の話をするときに、人間はみんな同じだと言い切るのも、乱暴。肌の色も、見た目も、身長も、身体も違う。高齢者と若者と私の肌は明らかに違う。誰一人同じではなく違って、違うというということは、その壁があるとも言える。それをどう認識するのかということから、いろいろなことが始まるのでは。

でも、この壁は、時に必要なこともあると思う。例えば、個の内面の繊細さを守るときや、個人と個人を無理やり一体化させるのではなく、お互いを尊重するため。

それぞれ一個の人間として違う私たちがいるから、一緒に面白いことが考えられる。ぶつかるともあるが、どういう風に関わり合う接点を考えていったらいいのか、一つの方法というか、可能性がそういう場にあるし、表現が介在することで、いろんな違う視点から、相手の違う感触がとらえられたとき、私たちはこの違いをプラスに変えていけるんじゃないかという気がする。

永山氏：演劇の現場では、みんなで丸くなって座る、車座になることが多く、とても好きなのだが、真ん中に物を置き、それぞれの座っている場所からどう見えるか。当たり前だが、見える景色が違うはず。私には見えない角度もある。

物の本質は、すべての人の話を聞いたときに一番よくわかると思う。

でも、今は、声の大きい人が、これはこういうもんだと言ったら、それに従わないといけな

い空気、忖度とか。

一番健全なのは、皆が自分の見え方を言えること。

大事なことは、お互いにみんなが言える状況を作っていくこと。

みんなが自分が思っていることを、見ている世界というものを言えることは、大変だが、大前提。

私たちが生きている時間は本当に短い。たかだか長くて 80 年。この時間を味わって、せめて死にたい、終わりたい、と思う。

どんなにおいしいごはんがあっても、それをばーっと食べたら寂しいと思う。目の前にあるごはんを、丁寧にゆっくり味わうことが、自分が生きてるってことを味わうためには、そこに時間をかけることはとても大事な時間。

そういう意味で一部の総括をお話すると、皆さん、それぞれの場所で、それぞれに見えることを見て、形にすることをしていच्छる。今日の 4 名だけではなくて、そういう方が宮崎に本当にたくさんいच्छる。

私たちは、何が足りないかというところから物語を始めてしまいがちだが、何を持っているかという、冷蔵庫を開いて、今入っているこれとこれとこれで、おいしいごはんを作ろう、というありかたで言うと、宮崎に本当においしい食材が、地道にそれぞれの活動をしていच्छる、素晴らしい人たちがたくさんいる、そこから始めたいという思いがあって、今回、芸文祭の出会い系を担当している。

一部に出ていただいた皆さん、それぞれの活動に本当に敬意を持っているし、そういう方がいच्छるといच्छるということ、この機会を通して、たくさんの方に知っていただきたい。

○「障がいのある人と、そうでない人が一緒に楽しめるとは、具体的にどんなことだと思いますか、どんな工夫が必要だと思いますか」という質問への回答

吉野氏：障がいのある人とない人が一緒に楽しまなきゃいけないという考え方自体がしっくりこない。そもそも、障がいのある人とない人の線引きって、そんなに明確なものなのかということが自分の中でモヤモヤする。

障害者手帳をもっていなくても、ある種の生きづらさとか、生きる上で社会に対して障がいを感じている人ってたくさんいて、軽重も含め、グラデーションだと思う。

永山さんが、障がい者芸術として何かやっているのではなく、演出家だから演劇の作品を作っているんだ、と言われた。演劇を通して永山さんは社会に関わり、社会参加をして生きており、それはパン屋がパン屋をやることで社会参加しているのと同じだと思う。

その中で、永山さんが、この人には役者として舞台に出て欲しいと思った人たちとやっていて、それがたまたま車椅子の方であったり、知的障がいがあると医学モデル的には言われている方だったり、でも、そうでない俳優もいたりするだけで、最初から障がいのある人とない人が一緒に楽しくやる劇団を作ろう、というふうにして作ったわけじゃなく、結果的にそうなったのだと思う。

私もジェニー・シーレイさんを日本に呼んで、エイブルアート・オンステージの一環でいろいろな人が混ざって作品づくりをすることになったときに、俳優となる人から、稽古場まで

盲導犬で来るが、犬が道を覚えるまでの何回かは車で待ち合わせたいという話があったりした。食事やトイレの介助のために稽古場に同行するヘルパーさんがずっと見ているだけでは苦痛だろうから、休憩の間は外で休んでもらって、代わりに俳優仲間が介助を分担したりもした。障がいのある俳優さんが常に助けてもらってるだけではなく、車椅子ならではの動きを見て、障がいのない俳優が悔しがったり、対等な関係ができた。

その人の背景にある物語や状況にお互い自然と目が向いて、関わり合いの中で、一緒にこの時間をどう作っていったらいいか考えていく。それが自然なことで、もっとそういうことがいろんな場所で起きればいいのではないかと思った。

永山氏：私たちは、人に説明するなら、「障がい者もそうじゃない人も一緒に作品を作っている」ということになるが、テーマとか言葉があって、それを追いかけてやると、本質を見誤ってしまうと思う。

前、夜中に高校生と街を歩いていて、赤信号だが、車は1台も通っていない、人も通っていないところで止まるか質問したことがある。半分くらいは止まる、と言って、私は気持ち悪いと思った。

信号が何のためにあるのか、という前提がすっ飛ばされて、赤だから止まる、というルールしかない。人が事故にあわないため、けがをしないために信号があるのだから、そこで待つ理由はない。

これは例え話だが、いろんなところで、空気に従う、上司に従う、法律に従う、従うってことは賢い生き方だ、とされていて、そこからはみ出さないことが大事だとされている。

でも、その信号を、なぜこんなことをしているんだということを疑わないと、次に更新されていかない。だんだんと社会は停滞していき、新しいものは何も生まれなくなって、同じものしか見えなくなっていく。まさに今、日本がそうなりつつあるのかもしれない。

私が障がいを持つ人たちとやっているのは、なんとなく従わなきゃいけないものから外れられるから、別の視点がもらえるから。

別に障がいを持っている人たちのための社会貢献や福祉のためにやっているとは全く思っなくて、ただただ楽しいから。つまり、自分の持っていない視点をいつももらえる。

演劇は、人間とはなんぞや、ということ自分の生身の身体を通して考える、という表現なのだが、生まれてから死ぬまで、自分の身体しか体験できない。人の身体は体験できないから。

でも、いろんな人と会うことで、その人の物の見方、感じ方などを演劇を通していろんな人に出会うことで、人の身体をちょっと入れることで自分の身体が軽くなったり、広がったりするというのが、演劇の現場では起きる。

そういう意味で、私たちにとっては、和田君や吉野さん、森さんという固有名詞なのに、「障がい者」という後付けの、どこかから借りてきたカテゴリーや名前をまとめることを本当はしたくない。一人ひとりが目の前で生きている身体なのだから。

私たちにとって、作品を作るということはとても楽しくてやっているのであって、障がいを持っている方とともに楽しむということなのだが、結果としてそうとしか言えない、ということをやっているのであって、それが先にあったものではないと思っている。

山森氏：横浜市に障害者後見的支援制度というものがある。障がい者の方が支援施設を移るとき、ノ

ウハウが実は引き継がれないのだが、その人がどのような支援を受けて、自閉症や統合症などの障がいのいろんなパターンや、その人の喜ぶこと、つらいと感ずることなどが全部ファイレィングされ、共有されている、というものがある。

こういうことが芸術文化的なことで行われていったとしたら、広がるのではないかという可能性を考えた。

令和元年度、国文祭・芸文祭チームが、空港や駅などのバリアフリーのチェックをしてマニュアル化するという取組をしていたのと同様に、心持ちはあるがそのきっかけになることはとても難しいので、事例を紹介して、これならできるかもしれないと思ってもらうことは大事なのではないか。もしかしたらそれは行政の仕事なのかもしれないと思った。

吉野氏：「従う病」から私たちが解き放たれて一個一個の市民としてきちんと意見を持ち、考えていくっていうのは、民主主義の基本だと思うが、それが今、崩れているのでは、と思う。その状況を見つめ直すことも、実は、今回の国文祭・芸文祭のようなフェスティバルの中でできる一つのことかもしれない。

大塚さんが、「これは種まきみたいなものだ」と言われるように、全国各地回り持ちでやって、終わった後、全部なくなってしまうと意味がなくて、それをきっかけに続いていくものを残すための場だという話があった。

だから、7月に始まるフェスティバルに向けて、開村式が今日あって、この文化祭の一部として始まっているということは、「芸文祭」は、今ここから始まる村を祝うお祝いで、お祝いは終わるけど、村は残り、残っていく村を、どう存続させ、継続させて、維持していくのか、となると、行政の話になってくると思う。

ゆかいアート村をゆかいな状態で存続させていくためには予算が必要で、議会で予算案が審議されて、議会を通過して通れば予算が付けられる。予算案のよりどころは、村民の皆さんとの会議の中で、どんなことが必要か、という意見をもらうことや、法律（文化芸術基本法など）であったりする。

国の文化芸術関係の予算や、障がいのある人たちの文化芸術活動の推進支援は、法律があるから、その大義名分があって、予算化される。

このゆかいアート村は、宮崎県下に設置されるので、県の状況を調べたところ、「宮崎文化振興ビジョン改定版」をさらに今改定しようとしていて、概要が5月に出るとのこと。改訂版資料8ページの、「本県文化を取り巻く現状」の項目の4番に、「平成32年度国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭の本県開催に向けた取組」という見出しがあって、こんなものが開催されますよ、「本県の魅力を国内外に発信するとともに、交流の輪を広げ、」云々、と書いてあるから、今、このようなシンポジウムをやっているのだと思う。

さらに後ろの方の21ページに、施策について具体的にいろいろ書かれていて、施策2の「創作・発表機会の充実」というところの⑨に「障がい者の創作・発表機会の充実 ・障がい者の社会参加意欲の向上と県民の障がい者に対する理解の促進を図るため、障がい者の文化活動のレベルアップを目指した講習会を開催するとともに、活動の成果を発表する機会の充実に取り組みます。」と書いてあって、そのちょっと前に、「あらゆる県民が交流する」というようなことも書かれている。

だから、いろいろな人たちが関わり合って、接点を持って、交流するためにできる、イン

フラ整備的なこと、そこは行政がやらないと。バリアフリーの実際問題とか、個々の関係の中で解決しづらい、資金的にも、物理的にも、大変なところが支援され、行政によって、税金によって整えられて私たちが関わりあい、「障がいのある人」とくくられた人だけが支援される弱い立場にいるのではなく、その交流によって、「障がいがない」とされている人たちの中にもいろいろな生きづらさとか、悩みがあるものが、お互いに関わり合って、支え合っていける関係につながっていくのが大事だと思う。

永山氏：私は一種の理想というか、現場の物の見方という話をしているが、私たちの社会の総意として、私たちが何を大事にするのかということが、当然、そのビジョン、条例、法律に関わってくることだと思うので、私たちの知らないところで勝手にできているということではなくて、すべての人が関わっているという形で、個々の物の見え方の結晶のようなものがそこに生まれてくるといいと思っている。

山森氏：最後にしたかった質問が「国民文化祭が終わった後、宮崎の文化、文化関係の人がどんな動きをすべきか」というものだったが、今のお話にアイデアがあったと思う。

吉野氏：コロナ禍で、こういう文化祭をやるのはどういう意義があるのかについて少し触れておくと、今まで話したこと全てを考えたら、コロナがあってもなくても、やるべきことをやっているだけだと思う。

同時に、でもコロナだからこそ、どんどん人の関係が希薄になったり、経済的な影響も受けたり、今障がい者と言われていない人でもこれからメンタルを病んだりするかもしれない。自殺者は既に日本で増えているし、孤立していく人がさらに増えるなどの影響が出てくると思う。この文化祭をきっかけに、いろいろな接点やつながりができ、一方向から見ただけじゃなく、いろいろな見え方があるという視点や価値観が作られていけば、救われていく人が増えるのではないかと思っている。